

桂離宮を巡る (9) 泣きたくなったタウト

藤原 道夫

桂離宮を訪ねた人として外せないのがベルリンを中心に先進的な集合住宅の設計を行った建築家ブルーノ・タウト。折からナチスが台頭し、ユダヤ人の彼は故国を逃れてアメリカにわたる途中、昭和8年(1933)日本に立ち寄った。日本の知人の案内により桂離宮や伊勢神宮を見学し、『日本文化私観』を著している。桂離宮を見学して日誌に残した「泣きたくなるほど美しい印象だ」という言葉は、しばしば引用される。

日本人には欧米人が発言したことをありがたがる性癖があるように思う。日本の文化は、特に明治以来欧米人の新奇の目にさらされ、さまざまに表現された。先陣をきったのが A.フェノロサで、明治11年(1875)25歳で東京帝国大学の教授として招聘され、日本に「美術」の概念を導入した。薬師寺東塔を「凍れる音楽」と表現したのはこの人だ。

タウトも外国人流に日本の美を再発見したと思ったようだが、それは勘ちがいではないか。彼以前に日本人自身が自国の文化を常に再発見してきた。ただ、日本人は外にむけて自国の文化について発信するのが苦手で、外国人に日本文化を理解してもらおうとする努力をおこたってきた。

桂離宮の美を創りだした感性は、建築家、評論家や小説家によって受け継がれていく。例として谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』をあげたい。そこでは、書院の襖が弱い光を受けてかすかに煌く様子、暮れなずみ石灯籠に火が灯る頃の風景、池に映る月の光のゆらめきが茶室の天井に映る光景などを愛でる感性が礼賛されているように思う。

タウトのいうことは理解できる。しかし、桂離宮をいく度となく訪ねて泣きたなくなったことはない。ここを創設した人たちの自然を巧みに庭のなかに取り入れる感性、襖の造りなど内装に見える審美感、舟遊びをしながら漢詩をつくり和歌を詠む教養、月を愛でながら典雅な宴を開く情緒などなどに思いを馳せるとき、敬慕の念が湧いてきて胸がひきしめられるような不思議な感覚にとりつかれる。